
けもの

弥招 栄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
けもの

【Nコード】
N8139D

【作者名】
弥招 栄

【あらすじ】
バイトの帰り、ヨシトは幼馴染のヒロと並んで、最終バスを待っていた。闇に縁取られた口元が、ヨシトに問う。「けものって、なに？」 はじめて僕は彼女の心を覗いた。 はじめて僕は彼女を抱きしめた。 はじめて僕は彼女を欲しいと感じた。 はじめて僕は彼女が愛しいと思った。 ぼくは、初めての勇気を持つことができるのだから―― 春の競作祭「はじめてのxxx。」 参加作品です。

ブローグゝ猫のなく声ゝ（前書き）

この作品は、春の競作祭「初めてのxxx。」に参加作品です。
TOPに特設サイトへの入り口を設けておりますので、そちらへも
ぜひどうぞ。

それでは、春のお祭を、お楽しみくださいませ。

ブローグー猫のなく声

その日も、猫の鳴き声がかすかに聞こえていた。

親にはぐれた仔猫が呼ぶ、哀しい声。

胸を引っかくその声が、嫌いだ。

助けてやることができない、己の無力さをあらわにされるから。

いや――

ほんのわずかな勇気さえあれば助けてやれるのに、何も出来ない
己の臆病さを思い知らされるから。

その日も、猫の泣き声がかすかに聞こえていた。

その声を聞くのは嫌だったけど、扇風機がかき混ぜる生暖かい部
屋の空気に耐えられなくて、ベランダに出ていた。

意外と近くから泣き声が聞こえた気がして、つい見回した視線が、
泣いている仔猫のそれと合った。

もう少し力があれば。

いや。

もう少し勇気があれば。

——助けてやれたのに。

仔猫が目の前で車にはねられるのを見たのは、それからちょうど一週間後。

それは、それまでの平穏を装った日常が、ついにぶっ壊れた瞬間だった。

第一話〜最終バス〜前編

「ねえ、けものつてなに？」

「……あ？」

道路に背を向けて、バス停の時刻表示板にもたれていたヨシトは、ケータイを覗く顔も上げないまま、返す。

「けものつてなに？」

しかし繰り返し問われ、あてどなくウェブの上を探っていた指を止めた。もともとなにか目的があつて、ネットをみていたわけじゃない。ただ、手持ち無沙汰な時間を埋めるための習慣になっている、それだけだったから。

「ケモノつつたら、ケモノだろ」

そう言つて、ヨシトは目を上げた。

狭い、肩に触れずにすれ違つのがやつとの歩道をはさんで、斜め向かいにヒロがいた。漆黒の髪に縁取られた白い顔が、真っ直ぐにヨシトへと向けられていた。梅雨明け前の生温かい風が、輪郭を揺らす。

その顔に、ヨシトは思わず息を呑み、見とれた。家族の、いや、自分のそれよりも見慣れたその顔が、いつもと少し違う気がして。だけど、その正体に気づく間もなく、次の瞬間にはふいと背けられてしまう。

ファン、とじめついた空気を揺らして、警笛が響いた。最終のJRバスが、ヘッドライトをぼんやりと光らせながら、のたのたと近づいてくる。その光が、ヒロの目を暗く輝かせた。

その音を合図に、サラリーマンや学生のなりをした酔っ払いたちが、わだかまった闇の中から、そろそろと這い出してきた。みんな暗い眼をして、バス停に停まろうとしているバスを見上げている。

そんな夜の生き物たちを尻目に、ヒロがステップを駆け上がる。そして、あつかんべえをする整理券を二枚引っこ抜いて、八割がた埋まっている車内の空席へ向かって突進する。その三歩ほど開いた距離をヨシトはゆっくりと追いかけて、彼女の横をすり抜ける。ヒロは、ヨシトが二人掛けの窓際の席に座るのを待ってから、その隣の狭い間隙に、細い身体を滑り込ませた。

そんな二人を見れば、当然周囲の人間は彼らが付き合っていると思うだろうし、クラスメートたちも二人を公認のごとく扱っていた。だけどヨシトはヒロのことを、自分の彼女だなんて思ったことは一度もない。今みたいに、当たり前のように身体を密着させてくるヒロに、性を感じたこともない。

妹のようなものと、もし誰かに問われれば、間違いなくヨシトは首を横に振る。

妹は一人いる。今十四歳。その歳で濃い化粧を覚え、零時前に家にいることはほとんどない。まるで両親の機嫌を損ね、兄に八つ当たりをさせるために存在するような、ヨシトにとってうざったいだけの妹。

そんな彼女でさえ、もしヒロのようにくつついてこれれば、女を意識しないではいられないだろう。

じゃあ、男の友人みたいなものか……

体が大きく揺さぶられる。最終に乗り遅れまいと、必死に、しかしよたよたと走ってくる酒袋たちを飲み込んだバスが、発車した。その揺れに合わせて、ちらりとヒロの横顔を盗み見る。

ヨシトには、女性に対する審美眼が、どうやら欠けているらしい。クラスメートたちがみんな持っているらしい美醜の基準が、彼にはいまひとつわからない。

そんなヨシトから見ても、ヒロは美人なんだろうなと思う。彼女に対する悪口は、数え上げればきりが無いけれど、見た目に関したものは、聞いたことがない。

——だからなんだってんだ。外見なんかが人の価値を決めるわけじゃない。

ヒロが振り向きそうな気がして、慌てて彼女の横顔から目をそらし、反対側に顔を向ける。代わりに目に映るのは窓ガラスに浮かぶ凡庸というには少し類人猿に似すぎている、己の顔。そして、その後ろから覗き込む、ヒロの目の幻像。それと目が合ってしまった、仕方なく再度振り向く。

「なによ」

「な……なにがだよ」

息がかかるほど近くにある、ヒロの顔。そして、目。

——やっぱり男とは違う。

陰に沈むその奥の瞳に目を奪われながら、ヨシトは思う。少なくともヨシトは、こんなに関近で、野郎と見つめ合いたくはない。だけど。

ヨシトはふと、妙な感じに襲われた。いつからだろう。常に苛立ちと、怒りと、目を通じてさえ己の心をさらけ出すことを拒むかたくなさを宿すその瞳が、今日は弱い気がする。バス停でもわずかに覚えた違和感。不審を太い眉に乘せて、思わず覗き込むヨシトの視線を、ヒロは、また俯くことで、避ける。ヨシトは戸惑った。いつもなら、目を逸らすのは、彼のほうなのに——

「ククッ——」

二人の上から、不意に嘲笑が降ってきた。腐った柿のような匂いが強くなる。

「ンなんやあ、にいちゃん。フラれたんかあ、あ？」

いやらしげなガラガラ声。一呼吸おいてから見上げれば、四十絡みの薄汚い酒袋がそこにひとつ、座席の取っ手に引っかかっていた。

第一話〜最終バス〜後編

「こんなムードもないところでチュウしようても、ダメやで。そりや彼女も嫌がるわ」

しわくちなやなねずみ色のスーツを着た中年男の濁った目には、ゴリラ顔のマセ餓鬼が、隣に座る少女にキスをしようとして拒まれたように見えたのか。

「そんなガキより、おいちゃんとせんか？ おいちゃん、キス、うまいんやで。めろめろにとかしたるわ。嬢ちゃんまだそんなん知らんやろ——」

男は、ヒロに覆いかぶさるように、ますます身体を寄せてくる。甘酸っぱい反吐の匂いが、はつきりと漂ってきた。

——臭い口い開くなつ、こんボケがつ！ ヨシトはそう一声怒鳴ると、席を立て男の胸ぐらをつかみ……

ハア。

出来もしないことを空想する己を、小さなため息であざ笑ってから、そつとヒロの様子を伺う。

「あ……」

ヒロはちょうど、目の前にだらしなくぶら下がっている、ペンシルストラ이프のネクタイに両手を伸ばしたところだった。

なにを期待したのか、酔っ払いのにやけ面が、さらに崩れ……

「おわつ、やめろつ——」

「をがつ」

ヨシトが静止の声を上げると、ヒロに思いっきりネクタイを引っ張られた男の口から苦鳴が洩れるのが、同時だった。

どちらかといえば小柄なヒロの、非力な腕で引かれたくらいでは、並の男なら揺るぎもしないだろう。だけどそのときは、酒の酔いとバスの揺れが、男の体から平衡感覚を奪い去っていた。

だるま崩しよりもあっけなく、座席の間の狭い隙間、ヒロとヨシトの膝の上に崩れ落ち、突っ伏す。

安い整髪料と脂でべとべとの髪を振り乱して、男がもがく。

その髪を、ヒロは躊躇^{ためら}いもせずに驚掴^{わしづか}みにし、二人の上から引き剥^{はが}がそうとする。もちろん、ヒロの力で持ち上がるほど、肉と脂肪の塊は軽くはない。しかし今度も、バスの揺れに起き上がろうとする男の力が合わさって、“軽々”と跳ねのけられる。そして、反対側の座席に座る〇しにぶつかって、とうの立つた悲鳴を上げさせた。
「なあおい、やめろって……」

『危険ですからあ、席にお着きください』

ヒロを静止しようとするヨシトの声に、運転手の間抜けな車内アナウンスがかぶる。

「……っひい」

そんな声は、立ち上がったヒロの耳には届いていないのだろう、擦り傷だらけのローファアの踵^{かかと}が、通路に腰を落としたまま波打つ酒袋に、三度、食い込む。いつもアスファルトを蹴とばすときと比べても、まるで容赦がない。男は身体を丸め、動かなくなった。いや、口元を押さえ、喉の鳴らしながら、震えている。口から酒が零^{こぼ}れるのを押し止めようとしている酒袋——いや、酒ガメだ。

手をつけらず、諦めたヨシトがぼんやりとそんなことを思った瞬間、ヒロが壁を殴りつける音が、ピンポンと響いた。

『次、停まります』

「降りる」

ヒロはそうぼそりとつぶやくと、座席の間に落ちたバッグを拾い、うずくまったままの男をまたいで降り口へと向かう。

「え？——って、ちよつと待てよ」

彼女の気まぐれには慣れてはいるが、二人の降りるはずのバス停は、まだまだ先だ。こんなところで降りたら、トラックばかりが通う国道を、小一時間は歩かなくてはならない。だからよしとは、ヒロを掴まえようと慌てて腰を上げ、そしてすぐに断念した。

ヒロは、ヨシトの言うことなら——ヨシトの言うことだけを——聞く。

だから、家の近くのバス停までおとなしく座ってると言えば、ヒロは文句を言いながらも、それに従うだろう。

しかし、ほかの乗客たちの、直接的ではない、だけど確かに感じる、真つ白の視線。常日頃から針の筵^{むしろ}になじんでいるとはいえ、後十数分を耐えるよりは、その十倍の時間を歩いたほうがまだ。

だったらヒロの気まぐれは、珍しくヨシトにとって都合がいいともいえる。

だから、速度を落とすバスにつんのめりながら、ヨシトはヒロの後ろを追った。

うずくまったままの酒袋から、すえた酒がついにあふれる音を聞きながら。

第二話　国道　前編

二人を置き去りにして遠ざかっていくテールランプを少しだけ恨めしげに見送って、ヨシトは小さく息を吐いた。

彼らの通う高校やバイト先がある市街地と、自宅のある新興団地をつなぐのは、片側一車線の古びた国道。山のほうに高速のインターチェンジがあるせいで、この時間は乗用車よりも荷物を満載したトラックのほうが多い。

かすれた白線と、途切れ途切れのガードレールで隔てられた、わずかな路側帯だけが人の領域。

その外側を、自らの同類が吐き出す黒煙を掻き分けながら、トラックたちが爆走する。

「はあ……。さてと、帰るかあ」

今度はあからさまにため息をついてみる。これからろくに街灯もないような道を、トラックのヘッドライトだけを頼りに歩かなければならない。その距離を思って、ヨシトは天を仰ぐ。月があれば少しはましかけど……。しかし空は、少し離れた街の光を反射して、鈍色に輝いていた。

「うわ、マジかよ。曇ってんの。なあ、雨降りそうだよ。早く行くぜ」

だけどヒロは、その場を動かない。

国道をはさんだ向かいに建つ、民家の壁をじっと睨みつけている。いや、たぶん、もっと、もっと、向こうを。

「おい、行くぞー……」

ヨシトの心を不安がよぎった。こんなヒロを見るのは二度目。前に見たときは――

「おい、やめろって!」

――車の行き交う道路を、ただ、前だけを見つめて渡っていった。そして、軽自動車の四輪がアスファルトを引っかく音と、次の瞬間

軽々と跳ね飛ぶ人形。

記憶に背中を突き飛ばされて、ヨシトはヒロに駆け寄った。その急な動きに驚いたのだろう、ちょうど通りかかったトラックが、一瞬ぐらりと揺れ、大きな警笛を捨て台詞に走り去る。

「なに」

肘を掴んだ手を、咎めるような目つきで見下ろされて、慌ててヨシトは離す。

「何でもねえ。早く帰ろうって。雨が降る」

その言葉にようやく、ヒロは身体を家路に向けた。

ふう、と、ふたたびヨシトの口からため息が洩れる。

今日は、なんか緊張する。二人きりのときに、こんなに神経を使うのも久しぶりだ。居心地が悪い。ヒロの様子がおかしいせいだ。いや、おかしいのはいつものことだが、今は何か、すごく不安定な気がする。

そのヒロは、身体とは垂直に、顔を空へと向けていた。二、三歩足を進めただけで立ち止まって。今にも泣き出しそうな空。

「降ればいいのに」

彼女は左足を上げ、そのまま下ろす。

ゴン。

アスファルトが、踵を痛めつける音。それが骨を伝って、ヒロの体中を震わせた。

「降ってどうすんだよ。七月だからって、風邪ひくぞ」

ゴン。

「やめろって。お前、手加減つつうか、足加減しねえんだから、また骨折るぞ。歩いて帰んなきゃいけ——」

グオアオオオオン……

震えるガードレールが、ヒロのローファアに新しい傷を刻む。どこかで犬が吠えた。

「ヒロッ！ やめるつつってんだろがっ！」

ヨシトがとうとう声を荒げた。だけどその声は、通り過ぎるトラ

ツクにあっけなく掻き消される。そして再び、それらをさらに覆い隠すほどの、低い金属の轟き。

「ヒロッ!」

「なんであんたは、あたしにやめろってしか言わないの?」

「なっ……」

いつもと変わらない表情で、ヒロが振り向いた。

逆上したばかりのヨシトの頭には、その問いは複雑すぎた。

弱々しくさえ聞こえるその声も、ヨシトの血の行き場を失わせさせる。

それらに掻き回された脳みそが、無数の想いを泡沫のように吐き出した。しかしそれらは、言葉になる前にはじけて消える。

その結果――

「なにアホ面してんのよ」

「あほ……? お、俺はなあ――」

――俺は、なんだろう。

第二話〈国道〉前編（後書き）

ただいま、ふたつの企画に並行して参加中です。
ひとつは、この作品が参加している、

春の競作祭「はじめてのxxx」。

もうひとつが、「いばらの冠」で参加している

「春エロス2008」

後者はR15になっていますけど、良かったらご覧ください。

次回第二話〈国道〉後編は来週火曜日の更新予定です。

第二話　国道　後編

「なによ」

「な、なんでもねえ……お前だって、なによ、しか言わねえじゃねえか」

「ふん」

ヒロはわざとらしくそっぽを向いてから、また左足を振り上げた。だけど今度は、確かめるように、そつと下ろす。ヨシトはそれが分かったから、今度は止めない。

「大丈夫か？」

「……うん」

目を閉じ、眉を少しだけしかめながら、二、三度アスファルトを踏みしめ、そして歩き出す。

左足を突くたびに、ヒョコヒョコと肩が触れる。だけど、痛いのか、とは、ヨシトは訊かない。ヒロは決して、自分の痛みを認めようとはしない。それはよく知っている。

高校に入学して、初めての夏休み前のこと、つまり、今からちょうど一年前か。教室でぶちきれたヒロが、机を思いつ切り蹴りつけたことがあった。

なぜ切れたのか、原因は覚えていない。たぶん、ヒロが通りかかったときに、同級生の誰かが笑うかどうかしたのだ、全く別の話題で。それが、彼女の足元に、誰かがシャーペンを落としてしまったのかもしれない。

ヒロがキレル理由は、いつもそんなもんだ。

だから、そのときすでに公認の『世話係』とみなされていたヨシトも、めったなことでは割り込んだりしなかった。人望が厚いわけでもない彼に、一瞬で沸騰する教室の空気を、冷ますことなんてできるはずもない。

しかしそのときは違った。

ざわついていた教室が、いつものようにヒロを責め詰ること^なもせず^なに静まり返った。

机を蹴り上げた彼女の左の脛^{すね}が、明らかにありえない曲がり方をしていたからだ。

慌てたヨシトが保健室に彼女を担ぎこみ、そして駆けつけた救急車に呑み込まれるまでの間、しかしヒロは顔面を蒼白にしながらも、一言も痛いと言わなかった。

ただ目を固く瞑って、みるみる腫れてゆく足の痛みを——そう、感じていた。

その表情を見たとき、初めてヨシトは理解した。

ヒロは、腹が立つから、頭にくるからキレルんじゃない。自分を傷つけ、痛めつけるきっかけを探しているんだと。たぶん、カッターナイフを使わない、リストカットなんだ、と。彼女がそれを意識していないにしても。

それからヨシトは、ヒロがキレルたびに、積極的に止めに入った。彼女が自分を傷つけたがるのが、許せなくなったから。

なぜだろう……

今日まで誰にも問われたことはないから、ヒロをかばうことで段々と壁を高くしてゆくクラスメートたちからさえ、問われたことはないから、考えたこともなかった。

なんであんたは……

今はじめにヒロに問われたことで、ヨシトの頭にその疑問が住み着いて、暴れる。

なんで俺は……

「ヨシト？」

五歩ほど前で、ヒロが振り向いてヨシトを待っていた。

下ってきたトラックのヘッドライトが、逆光となつて彼女の輪郭を際立たせる。光はくるりと、轟音とともに回りこんで、端正な横顔と、その奥の瞳を一瞬照らした。

そうか……

ヨシトは、ヒロに向かって足を踏み出した。

ヒロはいつでもヨシトを見ている。パケ代を稼ぎたくてはじめたバイトにも、ヒロは当たり前前のようについてきた。ヨシトもそれを当たり前のように思っていた。

ただど痛み^{つむ}に心を奪われているとき、ヒロは目を瞑る。

ヨシトのいる世界と自分との境界を、薄い^{まぶた}瞼でさえぎってしまう。だから？

彼女の視線から目を逸らせてきたのは、ヨシトの方ではなかったか。

彼女が目を瞑るのは、ヨシトが目を逸らすのを見たくないからではないのか。

どうして？

疑問がただ、頭の中をぐるぐると巡る。

答えはわかっているはずなのに。

けもの……？

けものってなんだろう？

「なんか、へん」

「なんでもねえよ。喉渴いたなあ。自販機でも、どつかねえかな」

「角江橋のバス停んとこにあったと思う」

「よく覚えてんな」

「毎日通ってんのよ。覚えてないほうがおかしいよ」

「いちいち覚えてられつかよ。まあいいや。早く行こうぜ。おっつてやるよ。バイト代出たばっかだし」

「うん」

他愛のない会話。

ふつ、と、ヨシトは全ての疑問を忘れる。

べつたりとした、風のような日常が、ヨシトの求めていたものだったから。

あの日まではそうだった。いつも一緒にいるのが当たり前だった、

幼馴染との日常。

遠雷から耳を塞いでいれば、嵐は来ない。

それがどんなに間違った考えなのか、心の奥底に刻み込まれているはずなのに。

それでも、現実が消え去ってくれないかと期待してしまう。目を逸らしている隙に。

でも、嵐は消えてはくれない。

「ねえ。けものつてなに？」

「知るかよ」

第二話〜国道〜後編（後書き）

お付き合いいただき、ありがとうございます。

次回更新は、次の土曜日……って、今日更新ぎりぎり（汗）

もし気に入っていただけましたなら、ランキングクリックをお願いします。

よろしくお願いします。

第三話　坂道　前編

「あちー。ぜんぜん涼しくなんねえな。ジュースのみてえ」

左手でパタパタと顔を扇ぎながら、ヨシトはぼやいた。犬みたいに舌を出して、わざとらしくハアハアと息をしている。

「さつき飲んだばかりじゃない」

「うるへー。鞆全部人に待たせやがって。くそー。二、三本買っときゃよかった」

肘にかけていたヒロのトートバッグを振り回して、道を見上げる。変なところでまじめなヒロの鞆には、一日の授業で使う教科書の類が全部入っていて、ずしりと重い。そして、この先国道は山間に入り、ちょっとした峠と短いトンネルを越えないといけない。

夜になっていっそう湿気を帯びた空気は、トラックの熱い排気ガスと混じりあって、薄いシャツを素肌に張り付かせる。

さらに五分ほど登ったとき、ふう、と息を吐く声が聞こえた。

その声に釣られて目をやると、広がシャツをつまんで、はたはたと風を送り込んでいる。

トラックのライトがボタンをはずした襟口から射し込み、汗ばんだ胸元と白い下着を照らし出した。ヨシトは意識せぬまま、目を逸らす。

バスでならあつという間の坂道も、いや、だからこそ終わりのない急坂に思えて、疲れをよぶ。スポーツに縁のないヒロには余計に堪えるのだろう——それはヨシトも同じだったが。

「疲れた。休みたい」

「なに言ってるんだ。雨が降り出したらどうすんだよ。早く帰らないと」

見上げれば相変わらず月はない。鈍色の雲の動きは見えないが、生暖かい風は、少しずつ勢いを増してきていた。

「うわ!？」

ヨシトが空を見上げている隙に、ヒロが彼の前に回りこんでいた。それに気づかなくて、彼女の背中にぶつかってしまふ。

「なんだよ」

「押して」

「はあ？」

「背中押してよ」

肩越しに振り向いて、ヒロが言う。憎たらしいことに、ニコリともしていない。

「てめ、誰のせいで歩かなきゃいけねえって思ってたんだ」

「ヨッパライオヤジのせい？」

「はいはい、そうだねえ」

ヨシトは諦めてトートバッグを肩にかけると、よいしょ、よいしょとヒロの背中を押し始めた。

「うわぁ、らくちん」

「そ、そりゃ……よかった……ネ、と」

ハアハアと息を切らし、ぶつくさ言いながらも、ヨシトは押すのをやめようとしなない。

掌に伝わるじめついた体温も、疲れた身体にのしかかる重みも、なぜか心地よい。

ヒロは全く自分の足で登ろうとはしていない。それどころかそっくり返って、完全にヨシトに身体を預けている。

もしヨシトが不意に押す手を外せば、きっと彼女は背中をアスファルトに打ち付けるだろう。

そこに現れた信頼が嬉しい。それを裏切れることは、二度とできない。

——二度と？

ヨシトは頭を振った。——俺はヒロを裏切ったことはない。

——だけど……仔猫の泣き顔が——

「ちょ、ちよつと、止めてよ」

突然強い力で押されて、ヒロが悲鳴を上げた。

「もたもたすんなよ」

——網膜から消えない。

しかし、ヨシトの息が続いたのは、ほんの三十秒ほどだった。膝に手をつけて、立ち止まってしまふ。肩からずり落ちたヒロのバッグが、地面にぶつかる寸前で、手首に引っかかる。

「やつぱりあんた、馬鹿」

「るせ」

腰に右手を当てて睨みつけているヒロの息も、途中からほとんど自分の足で走ったからだろう、肩を揺らすくらいに上がっている。

「なあ……」

しばらく呼吸を整えてから、ようやくヨシトは顔を上げてヒロを見た。白い肌を桜色に上気させ、その上に汗に濡れた黒髪を張り付かせて、ヨシトを見下ろしている。

「なに？」

「けものつて、なんだ？」

雨の前触れの風が、どう、と吹き上げる。それは制服の端々を揺らすものの、重い髪はなびきもしない。

「それは私が訊いてるの」

口元に絡む髪の毛を、煩^{うる}そうに掻き退けて、それでも少し心地よさそうに、ヒロは目を細める。

湿度の高い、生温い風でも、汗ばんだ肌を少しくらは冷やしてくれる。

「いや、そうじゃなくて……っつか、そうなんだけど」

ひとつ大きな息を吐いて、やっとヨシトは身体を起こした。ヒロのバッグを担^{かか}ごうと背中にまわすが、自分のディバッグに跳ね返されて、ちよつと肩を落とす。

「なんで、そんなことを訊くんだったんだ」

しかしヒロは、すぐには答えずに踵を返し、ゆっくりと坂を上り始めた。

第三話／坂道／前編（後書き）

わ、間に合わなかった（汗）

お付き合いいただき、ありがとうございます。
次回は、きっと水曜日の更新です。

きつと……？

うん。きつと（泣）

第三話　坂道　後編

「なあつて」

ヒロの背中が、急に小さくなった。

「私って、けものなのかな……」

（猫の）

「なんだそりゃ」

「人はサ、人に生まれたら、勝手に人として生きていけるわけじゃないんだよ、きつと」

「なに、急にテツガクしてんだ？」

からかいの調子を声に込めようとして、ヨシトは失敗した。冷たい距離が、ヒロとの間に生まれた、そんな気がする。それを少しでも埋めようと、ヨシトは足を速めた。

「じゃあ、お前は人じゃないってのか？　じゃあ、なんだよ」

（泣く声が）

「——けものか？　けものってなんだよっ」

「けものってなに？」

ヒロは顔をうつむかせたまま、一定のテンポで足を動かしながら続けている。

ヨシトは困惑した。どんなに足を急かしても、ヒロに追いつけない。人とけものとの世界を分かっ線が、二人の間に引かれているのか。まるで足下の擦れた白線のように。

——ちがう！

ヨシトは歯を食いしばった。

——俺たちはずっと一緒にいたんだ。ずっと、同じところに。——
ただどあの時、視線が絡み合ったとき、いくら手を伸ばしても届

かない、手を伸ばすことすらできない距離が、分厚い壁が、二人の間には無かったか？

たぶん、ほんのちょっとした勇気で乗り越えられたはずの、無限に遠い距離。

「ねえ」

ヒロが不意に立ち止まり、くるりと振り向いた。

ヘッドライトとも、街灯とも違う、点滅する薄暗い明かりが、彼女の横顔を照らしていた。

「疲れた。休みたい」

「だから、なに言っ——」

「雨降りそうだし。休んでこ」

あたりの景色が、ようやくヨシトの意識に届いた。

ちらちらと色を変える、くすんだネオン。ところどころが切れたままの、電球の群れ。風にはさばさと音を立てる、色あせたビニールののれん。

峠の途中にポツリとある、瀟洒しょうしゃを装った、夜の建物。

「ば、馬鹿。ここは……」

「大丈夫。おごってあげる。バイト代、出たばかりだから」

まるで、喉が渴いたからジュースを飲もう、おごってやる、そんな口調。

「な——」

開いた口から、それ以上の言葉が出てこない。ヨシトの喉が、灼やけたようにひりつく。

「どうしたの？」

ヒロが一歩近づいた。

ご宿泊・ご休憩・フリータイムと書かれた料金表の明かりが、彼女の顔を、目を、照らす。

熱を帯び、潤んだ光を放つ瞳、上気し、汗ばんだ頬。ゆるく開かれた唇。

——違っ！ これはヒロの顔じゃない！

「私、知ってるよ」

「な……なにを」

——これは

（猫の泣く顔）

「見てたでしょ」

（浅黒い大人に組み伏せられてなく仔猫）

——成長した牝猫の顔

「ど、どうして——」

——せつかく、ぶっ壊れた日常こそが日常だと、そう思えるようになったのに

「ヨシトは私といたくないの？」

「なんで急にそんなことを言っただよ！」

第三話　坂道　後編（後書き）

いつもありがとうございます。

……ちょっとオフラインがえらいことになってまして（泣）
何とか更新は続けて生きたいと思っていますので、よろしくです
。

気に入っていただけたら、ランクリをお願いしますっ。

第四話　あの時　前編

近づいてくるヒロから逃げるように後退りながら、ヨシトは己の中心を痛いほど意識していた。

あの日から、無理やり押さえつけていた衝動が、いま一時に襲いかかる。

ヒロに対して性的な感情を持っていなかったからといって、ヨシトが異性に興味ないわけじゃない。

ただ――

あの日、自分ちの二階のベランダから、低い植え込み越しに見た光景が、常に枷^{かせ}となっていた。

開かれた窓の向こう、カーテンの隙間、常夜灯に照らされて。

裸で組み伏せられて、激しく揺れる黒髪の間から覗いたヒロの顔は、確かに苦痛に歪んでいた。――そう見えた。

（助けなきゃ）

だけどヨシトは動けなかった。

友人の家で、アダルトビデオを見たことがある。

ヨシトと同じく童貞であるはずの友人がしたり顔で『うわあ、やらしいな。こんなことされて喜んでるよ』、そういったときの、画面の中の女優の顔。それと同じ表情に見えた。だから。

仔猫の泣き声が、いつそう高まった。

ヒロは、何かから逃れようとするかのようにのけ反った。

そして、涙に濡れた目が――

（泣いてる。助けなきゃ）

――ヨシトの瞬き^{まばた}を忘れた目であった。

ヒロは確かに、ヨシトに気づいたはずだ。

仔猫の泣き声は続いているのに、彼女の身体はずっと揺れ続けているのに、ヒロの目は、その奥の瞳は、その中心は、ヨシトを捉えて離さない。

（助け…… なきゃ）

（ヒロが泣いてる）

（助けなきゃ）

（どうやって？）

（ここから飛び降りて）

（ケーサツ）

（表に回って玄関から）

（『喜んでるとき——』）

（父さんに）

（大声を出せば）

（——女は泣くんだぜ）

（へえー、ほんとかよ？）

泣き声はだんだんと高まり、揺れはさらに激しさを増して——終わった。

だけど、最後の瞬間まで、ヒロはその瞳をヨシトに向けていた。それが、ゆっくりと閉じられる。

いたたまれなくなつて、部屋の中に入ろうとしたヨシトの視界にはじめて、ヒロの上に乗っていた男の頭部が映った。

とてもよく知っている、隣のおじさんの顔。

ヒロの、父親の顔……

次の日の朝、ヨシトはバス停で、ヒロと会った。

「おはよう」

とっさに目を逸らしかけたヨシトに、ヒロは声をかけた。いつもと変わらない、明るい声。明るい笑顔。

「……おはよう」

ぎこちなく、ヨシトも応える。

「ね、宿題やった？ 後で見せてよ」

「う……うん」

昨夜の事は、もちろん言い出せなかった。

父親とあのような関係になることがよくないってことは、ヨシトも知っていた。

たとえそうじゃなくても、普通は人に見せるものでも、見られて嬉しいものでもないだろうと、想像はついた。

助けられなかった、助けなきゃいかなかったのかすら判断できなかった、そんな後ろめたさもあった。だから、いつもと変わらないヒロの態度が嬉しかった。

いや、都合が良かった。

少し考えれば、分かったはずなのに。

昨夜のことを気取らせまいと、ヨシトはかえって挙動不審になっているのに、どうしてヒロはいつもと変わらないのか。

もし、ちゃんとヒロの顔を、ヒロの目を正面から見る事ができていれば。

彼女が壊れかけていることに気づけたかもしれないのに。

だけど、その代わりに、ヨシトはその夜の出来事を『なかったこと』にした。

ヒロのことを恋愛対象としてみるには、ヨシトはまだ子供だった。意識するには、一緒にいる時間も長すぎた。

だからといって、彼女が特別な人間じゃなかったわけじゃない。何も変わらなかったわけじゃない。

顔を合わせていれば、ヒロの笑い声に泣き声が重なって落ち着かない。

夜になれば、また泣き声が聞こえるんじゃないかと耳を澄ませた。

あの光景を思い出して、オナニーもした。

ベランダから隣の窓を窺^{うかが}うことさえした。

そのぶん昼間は、以前と変わらぬ、何も見ていないふうを装った。

ヨシトの目には、ヒロも以前と変わらないように見えた。

それは、あの光景が一度限りの事ではなく、幾度も繰り返されてきた証に思えて、ヨシトの心をざわつかせたが、それも隠し通した。

——そのつもりだった。

もしヨシトが、自分を繕^{つくろ}うのではなく、ヒロを見ることに心を砕いていれば、気づいたはずなのに。

彼女が、いつも以上に、不自然なくらい、ヨシトの姿を目で追っていたことに。

いや、それでも気づくことはできなかっただろうか。

目が合いそうになるたびに、ヨシトは慌てて目を逸らし、そしてその度に、ヒロの目が哀しそうに伏せられたことに。

第四話くあの時く前編（後書き）

いつもありがとうございます。

ちょっとダーク？

でも、いいよねえ。

第四話　あの時　後編

それら、全てから目をそらせて、ヨシトは一日一日を過ごした。

日曜日、その頃はまだ友達も多かったヒロが、数人で連れ立って遊びにいくのを、カーテンの陰から見送った。

ふと見上げるヒロの視線に、慌てて隠れながら、明るい笑い声に胸をなでおろす。

そして火曜日。あれからちょうど一瞬間。気持ちのよい、さわやかな朝だった。

いつもと同じようにヨシトはバス停に向かい、そしてヒロを見つけた。

「おす。おはよう」

さりげなく声をかけられたことに満足しながら、ヒロに駆け寄る。

——大丈夫だ。今日も昨日と同じ……

「なんだよ。寝ぼけてんのか……」

ヒロは返事をしない。振り向きもしない。ヨシトに気づいた様子さえない。

ヨシトは急に不安になった。その理由は分からないまま。

「なあ、なに見てんだよ。何かあるのか？」

ヒロの視線をたどっても、向かい側のバス停があるだけ。さっき一台バスが行ったばかりだから、今は誰もいない。その手前を、通勤途中の車が行き交う。

「何もねえじゃねえか」

少し躊躇ためらいながら、ヒロの顔を覗き込み、息を呑む。

彼女は、何も見ていなかった。少なくとも、ヨシトはそう思った。

「ヒロ……？」

ふう——と、柔らかな風が吹いた。

ヒロの瞳が、なびくように揺れた。

その中に自分が映った、そうヨシトが感じた瞬間、ヒロが足を踏み出した。

何気なく、ただ、歩いた。

車の行き交う国道を、まるで青信号の横断歩道を渡るみたいに。

音は確かに聞こえていた。タイヤがアスファルトをかきむしる音を、薄いボンネットがへこむ音を、ちゃんと覚えている。

目だつてちゃんと見えていた。宙を飛ぶヒロのスカートが、妙にゆっくりとはためいていたのも、乱れた髪の下から広がっていく血の赤黒い色も、ちゃんと覚えている。

だけど、すべてがしんとしていた。すべてが真っ白だった。

時が止まったその一瞬、ただ、俺のせいだという声だけが、ヨシトの耳に聞こえ続けていた。

見ていただけなのに。そんな言い訳が、頭の中をぐるぐると回る。けど何が、見ているだけじゃない何かができたはずだ。傍観という名の罪があることを、ヨシトははじめて知った。

その日からずっと、ヒロは恋愛の対象でも、ましてや、性愛の対象などではなくなってしまった。

償い。

それだけが、二人をつなぐ絆。

それだけが、ヒロのそばにいられる理由だった。

今日までは。

だったら、ヒロはどうしてヨシトと一緒にいるのだろう。

そのことを考えたことは、一度もなかった。

そう。今の、今まで。

ザンッ。

山を揺らした生温かい風が、ヨシトの頬をなぶる。

それがまるでヒロの掌であるかのように感じ、身震いする。

動悸が激しくなっているのが、自分でもはっきりと分かる。息苦しささえ感じる。けれど、呼吸が荒くなっているのはそのせいだけじゃない。

人の目が、ぬらりと濡れた奥の瞳が、ヨシトの瞳の、さらに奥の脳髓を捉えて離さない。

欲望が、ヒロを欲しいという原初の感情が、ヨシトを支配しつつあった。

『けもの』

ヒロが拘こわっていた言葉の意味が、分かった気がした。

第四話くあの時く後編（後書き）

ごめんなさい、更新遅れてます（泣）

まずは言い訳（以下略）

では、次回までっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8139d/>

けもの

2010年10月9日18時39分発行